

内山充の生涯から教えられること：
出逢いと離別を経て醸成された使命感と責任感^{*1}

森 本 和 滋^{*2}

Lessons Learned in the Lifetime of Mitsuru Uchiyama: A Sense of Mission
and Responsibility Cultivated through Encounters and Partings^{*1}

Kazushige Morimoto^{*2}

(Accepted October 27, 2025)

Summary

Objective : The Author examined Mitsuru Uchiyama's life through the lens of the sense of mission and responsibility forged by encounters and partings.

Method : The posthumous collection of writings by Seiichi Okui, titled *Life*, was received from Mrs. Tomiko Okui. The information on Mitsuru Uchiyama's words and thoughts was investigated using literature, books, websites, and other materials.

Results and Discussion : The study was divided into four periods: 1) From birth to student years: Born in 1930 as the eldest son in Hyogo Prefecture (present-day Ashiya City). In 1947, he entered the Science Otsu Course at the former Tokyo High School, graduating in March 1949. April 1949: Enrolled in the Faculty of Liberal Arts, Division II of Science at the University of Tokyo. On July 7, 1958, he was awarded a Doctor of Pharmacy degree from the University of Tokyo. His doctoral thesis "Research on the Prevention of Internal Contamination by Radioactive Strontium" was supervised by Professor Chūnoshin Ukita of the University of Tokyo. Chūnoshin Ukita passed away suddenly at the age of 57. 2) Tohoku University Years: Seiichi Okui was raised in a Christian family and maintained a faith based on "I am the way, the truth, and the life" (John 14:6). In 1965, Professor Seiichi Okui passed away at age 45. With this parting, Professor Mitsuru Uchiyama's worldview, scientific philosophy, and social theories were forged. 3) National Institute of Health Sciences era: Published "Statement: What is Regulatory Science?" 4) From the Society of Japanese Pharmacopoeia to the Council on Pharmacists Credentials Pharmacist Certification System: Valuing encounters, constructing those sentiments into one's own words, encouraging and offering guidance to foster a sense of mission and responsibility as a pharmacist, and contributing to the establishment of lifelong learning for pharmacists.

1. はじめに

筆者は「使命感と責任感の醸成の視点からみた新製薬系

大学における薬学倫理教育の歩みとこれから」の論文の中で、倫理観の醸成に有用な概念として、レギュラトリーサイエンスとサーバントリーダーシップの重要性を提唱し

Key words : Encounters and partings, Man's extremity is God's opportunity, Sense of mission and responsibility, Regulatory science, Lifelong learning for pharmacists

^{*1} 本稿は、2022年11月5日に東北大学の主催で開催された日本薬史学会2022年会（宮城）で発表した内容、および2023年10月28日に就実大学薬学部で開催された日本薬史学会2023年会（岡山）で発表した内容を、大幅加筆修正したものである。

^{*2} 国立医薬品食品衛生研究所生物薬品部 *Division of Biological Chemistry and Biologicals, National Institute of Health Sciences (NIHS)*. Tonomachi 3-25-26, Kawasaki, Kanagawa 210-9501, Japan.

た¹⁾。その際、サーバントリーダーシップの個所で、内山充の言葉「専門職業人としての倫理とは、道徳とか個の尊重とかいうような、人としての基本的な倫理観に加えて、専門職業上で遭遇するあらゆる場面において、最善の判断基準をもって、正しい評価に基づく最適な行動が取れることをいう。この人格は、生涯学習によって得た豊かな知識・技術から生まれた「知恵」によって裏付けられるものであり、人間として最終的に具備したい資質ということができよう」を引用した¹⁾。

コロナ禍での2022年会（千葉）の基調講演では、薬剤師認定制度認証機構（CPC）設立15周年誌刊行：内山語

録—薬剤師へのメッセージを紹介した²⁾。

内山充の思いと言葉がどのようにして生まれてきたのかを、その生涯を大きく四時代に分けて調べた（表1）。

- (1) 生い立ちから学生時代
- (2) 東北大学時代の16年間：①奥井誠一教授と一緒に歩まれた助教授時代（1959～1963年）②教授時代（1968～1974年）
- (3) 国立衛生試験所（National Institute of Health Sciences：NIHS）時代
- (4) 日本公定書協会（Society of Japanese Pharmacopoeia：SJP）から薬剤師認定制度認証機構（Council

表1 内山充の年譜（Lifetime of Mitsuru Uchiyama）

年月日	年譜
1930年3月1日	兵庫県（旧武庫郡精道村（現芦屋市）にて長男として出生
1942年4月	東京府立第4中学入学
1947年3月	東京都立第4中学卒業
1947年4月	東京高等学校理科乙類入学
1949年3月	同校 二年修了
1949年4月	東京大学教養部理科二類入学
1951年4月	同校 医学部薬学科進学
1953年3月	同校 卒業
1953年4月	東京大学大学院化学系研究科薬学専門課程入学
1955年3月	同校 修士課程修了
1955年4月	同校 博士課程進学
1958年7月7日	同校 博士課程修了（薬学博士）
1959年4月16日	東北大学医学部助教授
1959年9月～1960年3月	米国・イリノイ州立大学（Urbana）留学
1965年4月	日本薬学会奨励賞受賞
1968年	東北大学医学部教授
1972年	東北大学薬学部教授配置換，衛生化学講座担当
1974年	厚生省入省国立衛生試験所 食品部長
1984年	同所 薬品部長
1987年	同所 副所長
1991年	国立衛生試験所長
1995年3月31日	同所定年退職
1995年7月13日	日本公定書協会会長
1995年～2003年	中央薬事審議会日本薬局方部会長
1996年	日本薬剤師研修センター理事長
1997年11月～2003年1月	中央薬事審議会会長
2000年7月	日本公定書協会会長退任
2000年11月	勲二等瑞宝章受賞
2003年	日本公定書協会会長に就任
2004年5月17日	薬剤師認定制度認証機構代表理事
2005年6月	日本薬剤師研修センター会長退任
2006年7月	日本公定書協会会長退任
2008年	薬剤師認定制度認証機構代表理事
2012年	同機構 顧問
2019年6月16日	逝去（満89歳）

on Pharmacists Credentials : CPC)

2. 方 法

生い立ちから学生時代の情報は、ご家族からの情報や博士論文³⁾から得た。東北大学時代では、奥井誠一遺稿集『いのち』を奥井登美子氏から謹呈を受けた⁴⁾。内山教授時代は、東北大学薬学部・薬学研究科五十年の歩み⁵⁾の出逢いを受けた。内山充の言葉と意思に関する情報は、文献、書籍、ウェブサイト、その他の資料を用いて調べた。

3. 結 果

3.1 生い立ちから大学院・博士論文

3.1.1 生い立ちから旧制高校

内山充は、1930(昭和5)年兵庫県(旧 武庫郡精道村(現 芦屋市))にて長男として出生。妹と二人兄弟である。12歳の時には、東京府立第四中学で学び、1947年には、旧制東京高等学校理科乙類入学、1949年3月には同校修了(註:同校は1950年3月廃校)(表1)。

3.1.2 東京大学入学から大学院時代

1949年4月、東京大学教養部理科二類に入学している(表1)。

専門課程に入った時、薬学のガイダンスでの奥井助教授との出逢いの印象⁶⁾を記している(表2)。

3.1.3 博士論文と浮田教授との出逢い

1953年4月東京大学大学院化学系研究科薬学専門課程に入学した。

1958年7月7日東京大学大学院化学系研究科薬学専門課程 博士課程を修了し、薬学博士を授与された(表1)。博士論文のタイトルは「放射性ストロンチウムによる体内汚染防御に関する研究」である³⁾。研究は、①放射線ストロンチウム(*Sr)の吸収抑制:実験方法:1) 摘出腸管を用いる方法, 2) *in vivo*法 ②*Srの排泄促進:実験方法:1) 有機酸・燐酸その他の投与実験, 2) アルミニウム化合物の *in vitro* 燐酸不溶化作用, 3) アルミニウム化合物の *in vivo* *Sr 排泄促進作用, より構成された。浮田忠之進教授は、指導教官であった。

浮田は、1915(大正4)年、代々生薬調剤を主とする大阪船場の旧家に生まれた。老舗薬業家に育った浮田は、はじめから薬学に進む志があったという。旧制第三高等学校から進み1938(昭和13)年東京帝国大学薬学科を卒業した。朝比奈泰彦教授の下で、生薬学教室の助手となり、1953(昭和28)年米国イリノイ大学のカーター(Carter)教授の下に1年間留学、研究は生化学の方向に転換し、有

機生化学研究の先駆者となった⁷⁾。浮田と内山は大阪と兵庫の関西人という縁での出逢いが生まれた。

3.1.4 小括

浮田忠之進教授は、生化学的な純基礎的な研究と衛生化学的な応用の双方に、その才能と手腕を如何なく発揮した。特に水銀測定には助教授の奥井誠一をはじめ教室あげて開発した放射化分析法を用いて数々のデータを示した⁷⁾。浮田忠之進教授との出逢いは、内山充のその後の人生にも大きな影響を与えた。

残念ながら、浮田忠之進教授は、膀胱疾患の悪化で1972(昭和47)年4月25日急逝され、悲しい別離となった。

3.2 東北大学時代

1959年、奥井誠一は東北大学医学部薬学科教授として、内山充は、同大学助教授として赴任した(表1)。

内山充の仙台での16年間は、奥井誠一教授と内山助教授時代(1959~1968年)、内山教授時代(1968~1974年)から構成されている(表1)。

3.2.1 奥井誠一教授と内山助教授時代(1959~1968年)

奥井誠一は、クリスチャンの家系で育ち「我は道なりまことなりいのちなり」(新約聖書ヨハネの福音書14章6節)に基づいた信仰を持ち続け、不幸にも1965年45歳で死去した⁴⁾。

誠一の死の直前3か月の日記の中での、内山の寄り添いに注目した⁸⁾。

1967/1/1 昭和四十二年の新春を迎う。昨年発見した言葉“Man's extremity is God's opportunity”(筆者訳:人間の試練は神の好機)まことに感慨をもって味わった言葉であった。すでに神に召された気持ちで努力することを誓う次第。

1/2 内山君来たり、咳が長つづきすること不愉快

1/23 夕刻秋谷先生より東大星野助教授死去の知らせを受け驚愕(これも Man's extremity)。内山君に連絡をとる。

2/13 朝零下7度。調子は次第によくなっているようだが、食欲不振。無理して食べる。夕刻内山君連絡に来る。

2/15 6時内山君連絡にきてくれる。

2/16 本今朝冷える。夕刻内山君連絡にきてくれる。

2/18 本日滝沢先生来診。マイトマイシンの注射は始める。(注:ここで日記は終わっている)

1967年3月18日誠一は死去。内山充助教授の寄り添いには、感銘を受けた。

表2 東大時代と東北大学時代 (The University of Tokyo Era and the Tohoku University Era)

タイトルと寄稿者名	年月日	言葉と思い
昭和 26 年の思い出	1951/4/1	第一印象について：専門課程に入った時、薬学のガイダンスがあったが、その会に当時の奥井助教授が姿を現わすと、先輩学生の間から拍手が沸いた。「あの先生は今度助教授になった奥井さんだ」と教えられたのが、私のはじめての対面だった。はにかんで赤い顔をしていた若い奥井助教授はいかにも新進少壮の学者という印象だった。
故人を偲んで：アミコス読者諸君に	1969/3/18	3月18日早朝、奥井誠一教授は、東北大学医学部附属病院において、45年間の生涯を閉じられました。いまさらもうすまでもなく多くの人に親しまれる性格と深いキリスト教の信仰が、奥井教授のたぐいまれなる人格を作り上げておりましたし、仕事の面でも雄大な計画で衛生化学の独特の研究と教育をはじめたところでしたので、教授の死は、大きな損失であります。「奥井の十戒」なるものが卒業生歓送会で発表されたのは確か昭和三十八年(1963年)だと思います。一、色のついたものは食べないが良い、二、煙草のすいがらを小便器にすてるな、(中略)六、大筋をつかめ、七、酒も煙草ものめない奴は体のどこかに欠陥がある、八、日曜はだめ(日曜は休養せよの意)、九、最後になるなかれ等、教授の日頃の言動を髣髴させるものがあります。今年からはクリスマスは毎年回ってきても奥井先生の「降誕祭説教」は二度と聞くことができないのが残念です。足の手術をされてからも東京方面への出張も相変わらず多く、超人的な御活躍であったと思います。その責任感と精神力には、ただ頭の下がる思いです。
奥井登美子氏からの手紙	2022/10/2	宮城年会を準備する過程で、下記の手紙を頂いた。「内山充さんにどれほどお世話になったか測りしれません。兄の誠一が45歳という若さで亡くなり、その後始末を助教授だった内山充がすべて引き受けてくれました。遺族の私たちに恩着せがましいことは一切なく、誠実で完璧なしごとでした。誠一が秋谷七郎教授から学んだように、仕事の仕方は助教授時代に教授の姿勢から学ぶのです。内山充は誠一のすべてを学んで、実直な人柄で、日本の薬学にとって大きな仕事をしてくださいました。……森本さんの発表を期待しています。」
東北時代を思う	2006/4/29	「教授時代」1968年4月に幸いにも医学部教授会で教授承認の決定を頂いた。教授として在籍したのは7年間であったが大学教官としての貴重な経験と忘れることの出来ない多くの出来事は、その後の私の生涯にきわめて有意義な影響を残してくれたと考える。在籍した時代は、今にして思えば大学紛争のさなかで、いわば「動乱」の感のある時代であり、必ずしも学問研究に専念するという雰囲気とはいえなかったが、幸い薬学部内は比較的落ち着いて教育や研究が行われていたと思う。「徹夜団交」団交の追及は止むことを知らず、ついに2晩目の徹夜論議となったが、夜半には次々とドクターストップで教授方が連れ出されて、3日目の夜明けには気がついてみると遂に残るのは私一人となってしまっていた。……団交事件の後、突如として施設部からはほぼ10坪の卓球部の新予算がついた。「紛争を省みて」1972年は、われわれが医学部薬学科から薬学部へ昇格した記念すべき年であるが、5月には沖縄が日本に返還されている。学内では、未だ紛争は収まらず沖縄返還協定に反対するキャンペーンとか、同年に学費値上げをきっかけに起こった教養部スト・バリケードも大きな問題であった。いったいあの時代は何だったのだろうか、今考えても整然と推移を説明はできない。いろいろな意味での矛盾が鬱積して、それが大きなエネルギーとして噴出したのかもしれない。「おわりに」今にして思えば東北大学時代は、私の成人生涯のほぼ前半を占める大切な期間だった。16年間というのは、過ぎてみればさして長い年月ではないが、またとない良き師弟同僚に恵まれ、様々な環境と人間との関係を体験することができた。そこには、語りきれない喜びと、悲しみと、楽しさと、悩みが思いだされる。思い出はさらに次の思い出を誘発する。東北大学時代に未熟な思考と経験で恐れもなく言っていたこと、やっていたこと、書いていたものなどを折に触れて目にするたびに、その時代に培った人生観や科学論や社会論が、その後現在に至るまで貴重な理念として私の中に生き続けていることが分かる。そしてそれらの基本は、未来を信じ、その未来のために努力し続けることである。

「アミコス読者諸君に」の故人を偲んで⁹⁾には、「奥井誠一教授は、東北大学医学部附属病院において、45年間の生涯を閉じられました。その責任感と精神力には、ただ頭の下がる思いです」と記している(表2)。別離の悲しみは、内山充助教授の使命感と責任感の醸成にも大きな影響を与えたものと推測される。

奥井登美子氏(義妹)からは、日本薬史学会2022年会

(宮城)で、筆者が口頭発表準備をしている時に以下のお手紙を頂いた。「兄の誠一が45歳という若さで亡くなり、内山充助教授がすべて引き受けてくれました。恩着せがましいことは一切なく、誠実で完璧なしごとでした」と内山充の使命感と責任感に感謝されている(表2)。

3.2.2 内山教授時代(1968~1974年)

「1968年4月に幸いにも医学部教授会で教授承認の決定

を頂いた。教授として在籍したのは7年間であったが大学教官としての貴重な経験と忘れることの出来ない多くの出来事は、その後の私の生涯にきわめて有意義な影響を残してくれたと考える」と記している(表2)。また「私の成人生涯のほぼ前半を占める大切な期間だった。16年間というのは、過ぎてみればさして長い年月ではないが、またとない良き師弟同僚に恵まれ、様々な環境と人間との関係を経験することができた。そこには、語りきれない喜びと、悲しみと、楽しさと、悩みが思いだされる。思い出はさらに次の思い出を誘発する。東北大学時代に未熟な思考と経験で恐れもなく言っていたこと、やっていたこと、書いていたものなどを折に触れて目にするたびに、その時代に培った人生観や科学論や社会論が、その後現在に至るまで貴重な理念として私の中に生き続けていることが分かる。そしてそれらの基本は、未来を信じ、その未来のために努力し続けることである」⁵⁾。

表2には記していない内山充教授の言葉を紹介する。「私の在籍した16年間に巣立っていった助手、大学院生、学部卒業生で、研究所の部長とか大学の教授になった者が21名と不思議なほど数が多い。また、企業や行政に就職したものも自営業についたものも、それぞれ信念を持ってユニークな道を歩んでくれたものが多いように思われる」⁶⁾。

門下生である嶺岸謙一郎氏と1974年NIHS医化学部で筆者も出逢いを経験し、11年間薬物動態の行政試験研究をご一緒させていただいた。

3.2.3 小括

45歳の若さで奥井誠一逝去。死に望んでの彼の思い“Man's extremity is God's opportunity”(筆者訳：人間の試練は神の好機)。57歳で浮田忠之進教授急逝。2人の死は、内山充の使命感と責任感の醸成に大きな影響を与えたことが示唆された。

3.3 国立衛生試験所(NIHS)時代(表3)

3.3.1 NIHS(1974~2012年)

1993年NIHS第21代所長時代(図1)に「ステートメント：レギュラトリーサイエンスとは—レギュラトリーサイエンス関連記事掲載の始めに当たって—」を発表した¹⁰⁾。

「レギュラトリーサイエンスとは、科学技術の所産を、人間との調和の上で最も望ましい姿に調整するための科学である。

- ①特定の目的を目指した多くの科学技術の試行を調整(レギュレート)して正しく方向づけすること

- ② 新しく世に問われつつある技術や材料を調節(レギュレート)して真に望ましいものを選ぶこと

- ③ 質と量、使い方 処理法を規制(レギュレート)することにより、安全性、有効性および品質を確保しつつ科学の恩恵を最大限に生かすこと」

3.3.2 追記

筆者は、1984年3月内山食品部長に米国ポスドク留学前挨拶に伺った。4月から薬品部長就任で多忙の中暖かい送別の言葉をかけてくださった。フィラデルフィアのペンシルバニア大学で活躍されている友の名前を挙げられ、きつと旧制東京高校の友人だったのかもしれない。「私は、ペン大学ではなく、ハーシーのペンシルバニア州立大学医学部癌研に留学します」と答えた。出逢いの始まりとなった。

3.4.1 日本薬剤師研修センター(Japan Pharmacists Education Center : Jpec)と日本公定書協会(SJP)時代(1996~2007年)

「7号提言『21世紀に向けての薬学教育のあり方は?』を読んで私はこのように考えます」と日本薬剤師研修センター(Jpec)理事長としての思いを記した¹¹⁾。本誌の表紙には、内山の若々しい写真が掲載されている(図2)。

「教育課程が受験資格と連動しているのは医療職の特色であり特権である。薬学が医療職教育に伴う義務と責任から逃れることは出来ない。」内山の強い思いが伝わってくる言葉である(図3)。

「インタビュー ~内山充先生にきく~ 東京女子医科大学薬剤部主任 武立啓子」では¹²⁾、「医療の中で医師や看護師と協力して、患者さんの選択できる医療にするために患者さんに情報を与えるのです。」と薬剤師の使命を明確に記している。

SJP企画の座談会「いまどのような医薬品が求められているか」の司会で、内山充会長は自らの思いを述べた¹³⁾。

「内山先生の質問(メバロチンを開発した中村氏に) 価値観の多様性が日本には欠けていることです。(中略) 医薬品開発というものに対する攻め方の多様性があることに気が付いていないところがあるかもしれません。何かいい方法はあればよいのですが。

中村：いまだに四年制は、創薬、六年制は実務と言ってます。本当は実務を知ってないと、創薬なんかできないはずです。むしろ六年制の人が薬を創ってくれないといけません」(註：学術部長であった筆者が本企画を担当)。

日本薬史学会総会公開講演(2007年4月14日)：「『評価科学』提唱への道りと近代化社会における役割について

表3 NIHS時代からCPC時代まで (From the NIHS Era to the CPC Era)

タイトル	書誌情報	言葉と思い
ステートメント：レギュラトリーサイエンスとは—レギュラトリーサイエンス関連記事掲載の始めに当たって—	内山 充. 衛生試験所報告. 1993; 111: 139-41	科学技術の所産を、人間との調和の上で最も望ましい姿に調整するための科学である。 ① 特定の目的を目指した多くの科学技術の試行を調整（レギュレート）して正しく方向づけすること ② 新しく世に問われつつある技術や材料を調節（レギュレート）して真に望ましいものを選ぶこと ③ 質と量、使い方、処理法を規制（レギュレート）することにより、安全性、有効性および品質を確保しつつ科学の恩恵を最大限に生かすこと
7号提言「21世紀に向けての薬学教育のあり方は？」を読んで私はこのように考えます	日本薬剤師研修センター (Jpec) 理事長 内山 充. HOHSEN J. 1997; 6: 10-3	医療職養成教育としての意義 教育課程が受験資格と連動しているのは医療職の特色であり特権である。薬学が医療職教育に伴う義務と責任から逃れることは出来ない。したがって薬学の中に医療(薬学)があるのではなく医療の中に薬学があると認識すべきである。継続的な自己研鑽に努めること。医師、歯科医師、看護師の職域ではこれらの遂行のために常に並々ならぬ努力がなされている。
インタビュー：医療薬学と薬剤師の教育・研修～内山充先生にきく～東京女子医科大学薬剤部 主任 武立啓子	ファルマシア. 1997; 33 (7): 731-4	患者さんが情報を持ち、患者さんが選択できる医療、QOLの問題とかターミナルケアもそうです。患者さんに情報をもたせるのは誰の責任かという、医者だけの責任なんていってられません。医薬品というのは医療の中で非常に大きな力と影響力もっています。 薬学というのは医療の中で医師や看護師と協力して、患者さんの選択できる医療にするために患者さんに情報を与えるのです。医薬品の情報は薬剤師の責任ではありませんけれど、そうすると、薬剤師だけしか知らない知識は非常に貴重なのです。
SJP 座談会：いまどのような医薬品がもとめられているか	中村和男, 池谷壮一, 内山 充, 大滝義博. Pharm Regul Sci. 2006; 37 (1): 1-20	内山先生の質問 (メバロチンを開発した中村氏に) 価値観の多様性が日本には欠けていることです。日の当たるところへみんなが押し寄せて、ゲノムと言ったら、ゲノムのところばかり……。医薬品開発というものに対する攻め方の多様性があることに気が付いていないところがあるかもしれません。何かいい方法はあればよいのですが。 中村 ：いまだに四年制は、創薬、六年制は実務と言ってます。本当は実務を知ってないと、創薬なんかできないはずです。むしろ六年制の人が薬を創ってくれないといけません。
「評価科学」提唱への道のりと近代化社会における役割について：CPC (薬剤師認定制度認証機構) 内山充 2007年4月14日 日本薬史学会総会 東大薬学部講堂	内山 充. 薬史学雑誌. 2007; 42 (1): 3-4	研究者や技術者は、自らの研究目的に向かって真摯に努力するあまり、研究成果を得ること自体が目的となってしまう、往々にして人と社会に対する配慮という点に欠けることがある。正しく調整するには、将来にわたる影響を予測し、開発の道筋を的確に評価しなければならない。それぞれの場面に応じて目的と手段の妥当性を評価して、常に最も適切な行動を選び、良質な健康と生活を実現すべく努力する必要がある。
内山充先生と薬剤師生涯研修制度～薬剤師認定制度認証機構の設立	吉田武美 2019/12/30 (CPC HP)	薬剤師は、ジェネラリストを基盤に、変化の激しい薬物療法などの専門領域での職能を発揮するために、常に自らの資質を向上して能力・適性を高め、業務内容を充実させることは、患者、医療従事者あるいは世間一般に対する社会義務であるとされています。 平成28年2月10日のかかりつけ薬剤師の取得要件の一つに「CPCの認証する研修認定制度の研修認定を取得していること」が挙げられ、それ以前の年間1万数千人から、その後の数年は4万人前後を数えています。(中略) ご冥福をお祈りいたします。
内山充先生を偲ぶ会 (Oct 17, 2020)	2020/10/17	***故人を偲んで*** 小生も故人とゆかりのあった一人として、薬剤師6年制教育にかかる約30年前の「薬剤師需給予測の研究は、薬学教育6年制のトリガーとなりました」ことを披露させていただきました。正面に飾られていた先生のお写真は、いつもの優しいほほ笑みをたたえたものでした。 藤井 基之 (参議院議員) 内山充博士の提言されたレギュラトリーサイエンスは、PMDAは科学的審査の礎となり、さらに世界の規制当局に急速に波及し、各国民からの信頼の根拠となりました。 近藤 達也 ((独)医薬品医療機器総合機構 名誉理事長)



図 1 第 21 代内山充所長(2013 年 11 月 12 日筆者撮影)
(1991/2~1995/3)
(Uchiyama, the 21th Director General of NIHS)



図 2 HOHSEN J 表紙 (1997)
(HOHSEN J Cover)

て」のタイトルで内山充 Jpec 理事長は講演された¹⁴⁾。

「研究者や技術者は、自らの研究目的に向かって真摯に努力するあまり、研究成果を得ること自体が目的となってしまう、往々にして人と社会に対する配慮という点に欠けることがある。正しく調整するには、将来にわたる影響を予測し、開発の道筋を的確に評価しなければならない。それぞれの場面に応じて目的と手段の妥当性を評価して、常に最も適切な行動を選び、良質な健康と生活を実現すべく努力する必要がある。」正しく調整、適格に評価、適切な行動がキーワードであることを指摘した(表3)。

3.4.2 薬剤師認定制度認証機構時代

病院薬剤師の経験を活かしてCPCで仕えた本学会 武立啓子評議員は、内山充先生を偲び、詳細に解説されている¹⁵⁾。

- 1) 生涯学習を支援、整備する組織の設立
- 2) 各種認定制度と専門薬剤師制度の発足と歩み
- 3) 生涯学習の水準の確保と内山充の貢献
- 4) CPC 代表理事内山充からのメッセージ

4. 内山充を偲ぶ言葉

4.1 吉田武美代表理事の追悼の言葉

2019年12月30日、吉田武美代表理事の追悼の言葉「薬剤師は、ジェネラリストを基盤に、変化の激しい薬物療法

など専門領域での職能を発揮するために、常に自らの資質を向上して能力・適性を高め、業務内容を充実させることは、患者、医療従事者あるいは世間一般に対する社会義務であるとされています。(中略)ご冥福をお祈りいたします」¹⁶⁾。

4.2 内山充先生を偲ぶ会

2020年10月17日内山充先生を偲ぶ会が大崎ブライトコアホールで執り行われた。故人を偲んでの2人の言葉を紹介する。

藤井基之(参議院議員(当時))

「小生も故人とゆかりのあった一人として、薬剤師6年制教育にかかる約30年前の『薬剤師需給予測の研究は、薬学教育6年制のトリガーとなりました』ことを披露させていただきました。正面に飾られていた先生のお写真は、いつもの優しいほほ笑みをたたえたものでした」(表3)。

近藤達也((独)医薬品医療機器総合機構名誉理事長)

「内山充博士の提言されたレギュラトリーサイエンスは、PMDAは科学的審査の礎となり、さらに世界の規制当局に急速に波及し、各国民からの信頼の根拠となりました」(表3)。

近藤達也名誉理事長は、2021年9月26日逝去された。別離は悲しく辛い。だが、2011年7月薬史学雑誌別刷り¹⁷⁾を持参して理事長室を訪問、近藤達也理事長との出

逢いは、筆者の宝物となっている。

5. 考 察

奥井誠一は、1966年“Man's extremity is God's opportunity”の言葉を発見した。同年東大衛生裁判化学講座・星野助教授の42歳で死去の報を受け、驚愕した。翌年3月18日自らも死去、内山もMan's extremityを経験した。

2020年1月20日、ご長男の伸（のぶる）氏と東京駅のホテルラウンジで1時間余の偲ぶ時を頂いた。「父から進路について何も言われたことは無かった。建設分野に進みレギュラトリーサイエンスの別刷りをもらって読みました。私の仕事にも役に立つ内容でした」。2022年4月14日、先生の信仰についてメールで尋ねた。「母徳子からは、カトリックの神父様のことなどを子供の頃聞いた記憶があり、何らかの交流があったと思います。聖心女子大学大学院で学びました。父のキリスト教に関する直接の言動を聞いたことはありませんので、どのように考えていたかは私には明確には分かりません。しかし、母の断続的な関係者との交流からして、一定の理解はあったと想像しています。お答えになっておらず申し訳なくおもっております」との貴重な思いを頂いた。

キリスト教の愛と仏教の慈悲を兼ねそなえた豊かな品性を持ち合わせた方であった¹⁸⁾。

25年の歳月を経て、内山は、レギュラトリーサイエンスの概念を高らかに提唱した。2024年10月28日の国立医薬品食品衛生研究所150周年記念会で¹⁹⁾、また12月3日の日本医療研究開発機構（Japan Agency Research and Development: AMED）「第10回レギュラトリーサイエンス公開シンポジウム」でも²⁰⁾、内山の提唱した理念がしっかりと我が国に定着していることが確認された。

6. おわりに

内山充は、様々な人々との出逢いを大切にし、その思いを言葉として遺し、大きな示唆と励ましを今も与えている。

筆者は、内山の薬剤師への思いを理解すべく70歳で蒲田薬剤師会未就業薬剤師研修を受講、薬局研修も受けた。認定薬剤師取得を目指して、薬剤師の仲間と毎月1回20時半から医師やMRから学術研修を受講、研修シールは、2019年12月に40単位に到達し、翌年1月晴れて認定薬剤師証をJpecから受領した。薬剤師名簿登録からちょうど50年目の節目となった。2020年春コロナ禍で、学術研修は全てストップ。Jpecや神奈川県薬剤師会等のオンラ

イン有料研修で単位取得となった。

2022年3月、研修シールの不正防止対策で薬剤師研修・認定電子システム（PECS）の登録をし、認定申請がスタートした。2022年12月無事PECS5単位を含む30単位を取得、更新1許可メールが1月19日Jpecから届いた。

更新2に向け、5月薬史学雑誌の原著論文²¹⁾申請、評価AでPECS1単位取得。

日本薬史学会2023年会（岡山）・土岐隆信年会長は、年会出席者がPECS単位を取得する道を開かれ、新たな風が吹き始めたことを実感した。土岐年会長は、体調が優れない中、使命を果たしていただき、2024年12月初めに逝去された。ご冥福をお祈りする。

使命感と責任感の視点からみて「自分に出来ることは何か？」を問いつつ、がん患者への寄り添いも13年目を迎えている²²⁾。昨年からは、かかりつけ薬局での模擬患者、清水眞知先生に声掛けを頂き平安堂薬局の「馬車道わくわくカフェ」²³⁾に参加させていただき、6回目を終えた。

謝 辞

国立医薬品食品衛生研究所生物薬品部 石井明子部長には、4年間本研究の励ましを頂きました。

奥井登美子先生から温かい言葉を頂きました。

内山伸（のぶる）氏からは、長男から見た父を教えてくださいました。

厚く御礼申し上げます。

COIの表明

筆者は、本稿に関して表明すべきCOI（利益相反）はない。

参 考 文 献

- 1) 森本和滋. 使命感と責任感との醸成の視点からみた新制薬系大学における薬学倫理教育の歩みとこれから. 薬史学雑誌. 2012; 47 (1): 31-43
- 2) 森本和滋. COVID-19が, 日本薬史学会に教えてくれていること. 薬史学雑誌. 2022; 57 (1): 1-8
- 3) 内山 充. 放射性ストロンチウムによる体内汚染の防御に関する研究. 東京大学薬学図書館. 博士論文集4
- 4) 奥井志つ. いのち. 中央公論事業出版 (非売品744), 1969. p. 1-396
- 5) 内山 充. 東北大学時代を思う. In: 創立50周年記念事業実行委員会. 東北大学薬学部・薬学研究科五十年の歩み. 2006. p. 19-22
- 6) 奥井志つ. いのち. 中央公論事業出版 (非売品744), 1969.

- p. 320-1
- 7) 西川 隆, 3. 浮田忠之進. In: 東京帝国大学医学部薬学科 一人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦. 薬事日報社, 2020. p. 142-4
 - 8) 奥井志つ. いのち. 中央公論事業出版 (非売品 744), 1969. p. 64-77
 - 9) 奥井志つ. いのち. 中央公論事業出版 (非売品 744), 1969. p. 166-9
 - 10) 内山 充. ステートメント: レギュラトリーサイエンスとは—レギュラトリーサイエンス関連記事掲載の始めに当たって—. 衛生試験所報告. 1993; 111: 139-41
 - 11) 内山 充. 7号提言「21世紀に向けての薬学教育のあり方は?」を読んで私はこのように考えます: 21世紀に向けての薬学教育のあり方. *HOHSEN J.* 1997; 8: 10-3
 - 12) 武立啓子. インタビュー: 医療薬学と薬剤師の教育・研修—内山 充先生にきく—. *ファルマシア*. 1997; 33 (7): 731-4
 - 13) 中村和男, 池谷壮一, 内山 充, 大滝義博. 座談会: 今どのような医薬品が求められているか. *医薬品研究*. 2006; 37 (1): 1-20
 - 14) 内山 充. 「評価科学」提唱への道のりと近代化社会における役割について. *薬史学雑誌*. 2007; 42 (1): 3-4
 - 15) 武立啓子. 我が国の薬剤師生涯学習の歩みについて—内山 充先生を偲んで—. *薬史学雑誌*. 2020; 50 (1): 38-53
 - 16) 吉田武美. 内山 充先生と薬剤師生涯研修制度～薬剤師認定制度認証機構の設立～. <https://www.cpc-j.org/document/column/20191230.pdf> (accessed 28 Jan 2025)
 - 17) 森本和滋, 藤原康弘, 川原 章. 医薬品医療機器審査センター (PMDEC) から医薬品医療機器総合機構 (PMDA) への15年の歩み: 設立初期を振り返って. *薬史学雑誌*. 2011; 46 (1), 38-50
 - 18) 奥田 潤, 森本和滋. 薬剤師活動に示唆を与えるキリスト教の愛と仏教の慈悲. *薬史学雑誌*. 2019; 54 (1): 39-52
 - 19) 国立医薬品食品衛生研究所創立150周年記念イベント. https://www.nihs.go.jp/dfa/150sp/150_index.html (accessed 19 Jan 2025)
 - 20) 「第10回レギュラトリーサイエンス公開シンポジウム」開催のお知らせ. https://www.amed.go.jp/news/event/241203_RSsympo.html (accessed 3 Dec 2024)
 - 21) 森本和滋, 日向昌司, 石井明子. バイオ後続品の同等性/同質性評価技術の進歩, 国内外における規制と承認の動向. *薬史学雑誌*. 2022; 57 (2): 128-37
 - 22) 森本和滋. 「がん哲学」読書会 in OCC の思い出. お茶の水がん哲学外来・メディカルカフェ in OCC 12周年記念誌. 2024.7.20. p. 54
 - 23) 清水真知. 平安堂薬局と馬車道: 馬車道150周年記念誌. 馬車道商店街協同組合. 2021. p. 18-9

要 旨

目的: 内山充の生涯を出逢いと別離で醸成された使命感と責任感から調べた。

方法: 奥井誠一遺稿集『いのち』を奥井登美子氏から謹呈を受けた。内山充の言葉と思いに関する情報は、文献、書籍、ウェブサイト、その他の資料を用いて調べた。

結果と考察: 1) 出生から学生時代: 内山充は、1930年兵庫県(現 芦屋市)にて長男として出生。1947年、旧制東京高等学校理科乙類入学、1949年3月には同校修了。1949年4月、東京大学教養部理科二類入学。1958年7月7日薬学博士を東京大学から授与された。博士論文「放射性ストロンチウムによる体内汚染防御に関する研究」の指導教官は、浮田忠之進東大教授であった。不幸にも浮田忠之進教授は57歳で急逝された。2) 東北大学時代: 奥井誠一は、クリスチャンの家系で育ち「我は道なりまことなりいのちなり」(新約聖書ヨハネの福音書14章6節)に基づいた信仰を持ち続けていた。不幸にも、奥井誠一教授は45歳で逝去された。別離の中で内山充教授の人生観や科学論や社会論が醸成された。3) 国立衛生試験所時代: 「ステートメント: レギュラトリーサイエンスとは」を発表した。4) 日本公定書協会から薬剤師認定制度認証機構: 出逢いを大切に、その思いを自分の言葉として構築し、薬剤師としての使命感と責任感の醸成に励ましと示唆を与え、生涯学習の構築に寄与された。

キーワード: 出逢いと別離, 人間の試練は神の好機, 使命感と責任感の醸成, レギュラトリーサイエンス, 薬剤師の生涯学習